

# 今年もまほろば合宿は素読に力を入れています。

「世界の中で尊敬される日本を築くために」

認定NPO法人まほろば教育事業団 理事長

学習院女子大学教授 畠山 圭一

平成二十五年は、日本人の心のふるさとである伊勢神宮の式年遷宮の年でした。参拝者は過去最高の二四〇〇万人を越え、日本人が自らのルーツを求めはじめていることを物語っていました。そのような中、東京オリンピックの招致が決定しました。それは決して偶然ではないでしょう。日本人の心が一つとなって引き寄せたものと思います。

日本の多くの若者が夢を抱いて世界のような舞台に立とうとしています。また世界中の人々が、日本の伝統文化の奥深さや科学技術の水準の高さに関心を寄せています。いずれも日本人の心が生き生きと躍動する姿の反映に他なりません。

若者の夢を育て、世界の中で尊敬される日本を築くために、青少年に日本のルーツとなる歴史、伝統、文化を伝える教育の再興が求められていると存じます。

まほろば教育事業団は、平成十七年、中西輝政会長（京都大学名誉教授）のもと、幼児、小学生、中・高校生を対象に、美しい日本の心を甦らせる教育の再興をめざして設立されました。名称に冠した「まほろば（真秀ろ場）」とは、日本の統とという困難な事業に生涯を捧げた古代の英雄ヤマトタケルノミコトが、その最期に望郷の思いをこめて、ふるさと・大和の美しさを称えた言葉です。私たちは、多くのご先祖様が、様々な困難を乗り越え、美しいふるさとを伝えて下さったことに感謝し、その美しい日本を受け継ぎ、世界に尊敬される日本人を育てることを志して教育事業を展開してきました。

その中で最も重視しているものの一つが「青少年の心を磨き、鍛えること」です。何事にも「心を込める」ところに日本文化の本質があると考えるからです。心を鍛えるとは、心がいつも生き生きと作動し、相対する人の心の動きに敏感に反応し、共感できる素地を身につけることです。それは社会の一員としての役割を体得し、さらには、国や社会のリーダーとしての資質を養うことに他なりません。

合宿では、殻を破る挑戦などの様々な共同体験、公に尽くした偉人達に学ぶ歴史研修、和歌創作・素読・礼儀作法などの修養を通じて、青少年の心を鍛え、一人一人のいのちの輝きを引き出しています。

私たちは、すべての青少年がダイヤモンドの原石のような存在で、その奥に素晴らしい才能、個性が輝いていることを信じており、運営にあたっては青少年とともに切磋琢磨し、自らも国や社会に役立てるよう研鑽に励んでいます。

合宿参加のおさそい

実行委員長

広島大学大学院教授 石田 敦彦

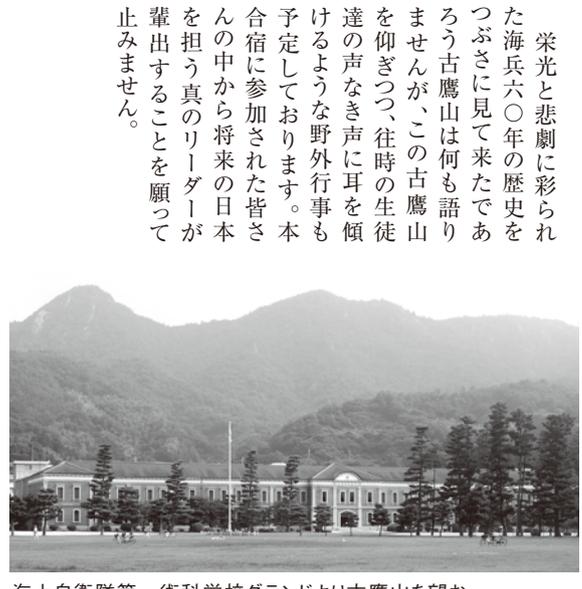
かつて「江田島」は日本男児の憧れの的でした。二高（今の東大）か海兵かと言われ、全国各地の最も優秀な中学生達が江田島にあった海軍兵学校（海兵）を目指したのです。厳しい入試を勝ち抜いて無事「江田島」に入校した生徒達は単なる受験秀才ではなく、率先垂範、指揮官先頭の精神を徹底して叩き込まれる中で人格と心身を鍛え、やがて多くの部下の命を預かる真のエリート、立派な海軍士官として「江田島」を巣立って行きました。その江田島教育は海外でも高く評価されたそうです。そして戦時の困難に際しては、卒業生の実に七割が祖国に命を捧げた時期もありました。そのような海兵生徒達によって長年歌い継がれて来た「江田島健児の歌」には次のような一節があります。

見よ西欧に咲き誇る文化の陰に憂いあり  
太平洋を顧みよ東亜の空に雲暗し  
今にして我ら励まずば護国の任を誰か負う

この歌詞が示す状況には現在も全く変わりが無いことに、まず驚かされますが、戦後日本の学校教育に欠けているものは、ここに歌い込まれているような烈々たる気概ではないのでしょうか。政治をはじめ、様々な組織や局面において、リーダーの不在が指摘されることの多い現代日本ですが、真のエリート教育、リーダー教育をなおざりにしてきた戦後教育のツケが随所に現れているような気がしてなりません。

終戦七〇周年の節目の年に当たる本年のまほろば合宿は、かつて海兵があった海上自衛隊第一術科学校にほど近い江田島青少年交流の家を会場として、多くの海兵生徒達を育んだ江田島の自然の中で日本の歴史を学び、祖国の礎となった数多の先人に感謝しつつ自分の将来に向けての志を固めるような夏休みのみと時を過ごしたいと考えております。かつて海兵生徒の厳しい鍛錬の場であった古鷹山は往時と全く変わらぬ姿で術科学校を静かに見下ろしています。

あわれ江田島古鷹山に やがて春来て人訪うあらば  
若い僕らの奏でし歌を 命美し（うまし）と聞き給え



海上自衛隊第一術科学校グラウンドより古鷹山を望む